

音節末における側面音のソノリティーおよび音節構造とのかかわりについて
—フランス語からの形態音韻論的考察—
桑本裕二（秋田工業高等専門学校）

一般に、ソノリティーの大きい分節音ほど音節の端（オンセットであれコーダであれ）に立ちにくいと言われている。多くの言語において、この位置でソノリティーが比較的大きいとされる側面音が、その音色を変えたり削除されたりといった作用を被る。本発表ではフランス語の語末側面音 /l/ の出現状況を分析し、それが他の阻害音と異なるのは主にソノリティーが大きいためであることと、鼻音ともその出現状況が異なり、時に例外的な分布を見せているのは、ソノリティーの大きさに加えてその音節構造上の問題に帰するという結論として導く。考察は最適性理論の枠組みを用いることとする。

フランス語において、語末の側面音 /l/ が、他の阻害音（および鼻音）とふるまいが異なる点として、主に次の3つを挙げることができる。

- (1) soleil [sɔləj] “sun”, travail [tʁavaj] “work”など、語末における母音化（半母音化）
- (2) cheval / chevaux [ʃəval / ʃəvo] “horse, sg./pl.” など、複数形での /l/ の消失
- (3) beau / bel / belle [bo / bɛl / bɛl] “good, m. (第1形), m.(第2形), f.” などの、男性形に異形態を生ずる形容詞の交替形における語末 /l/ の出没

/l/ の母音化に関しては、一般に言われている聞こえ度階層（sonority hierarchy；母音 > わたり音 > 流音 > 鼻音 > 阻害音）の順に聞こえ度が大きいとする階層をなす）により、流音が阻害音（あるいは鼻音）に比して聞こえ度がより母音に近いことから説明される。また、(1) からわかることとして、/l/ の母音化は、高母音 /i/ が先行している場合にのみ可能である。したがって、/l/ の高舌性 [+high] が引き金になりこの融合をもたらしたと考えられる。(2) の複数形における /l/ の消失は、削除というよりは、先行母音と融合し、/l/ の高舌性 [+high] を、この場合の [a] に与えて全体で [o] が形成されていると考えることができる。流音と同じく聞こえ度の高い鼻音の場合は、類似の環境（鼻音の場合は男女交替形で顕著にみられる）で先行母音を鼻母音化するが、先行母音と融合するという点で同等と言えるものの、(2) における男性単数形で語末の /l/ を単独の分節音として出現させていることで、鼻音（同環境で鼻子音は表れず、先行母音を鼻母音化。分節音としては存在しなくなる）とも、他の阻害音（同環境で消失）とも異なっている。この点では側面音のふるまいは母音に非常に近いといえる。このような側面音 /l/ の特異性について、最適性理論の枠内での、聞こえ度階層にかかわる有標性制約（*n(ucleus)/obs >> *n/liquid >> *n/nasal >>...）と、流音の場合、鼻音の[nasal] のようなかぶせ音素のようなふるまいができないことによる制限によって説明する。また、複数形で母音と融合する点に関しては、出力では出現しない複数接辞の -s が音節化に関わり、これを coda と見なすことによって先行する /l/ が音節核の要素となりうると説明できる。

この一方で (3) の曲用での語末の /l/ のふるまいは、鼻音の場合に非常に類似しており、この分布は OT 評価表においては鼻音の場合と全く同じように評価されうる。その場合、(2) での /l/ の説明に矛盾をきたすこととなる。つまり、語末の /l/ は様々な活用形の中で時に子音的に、時に母音的にふるまうと考えなければならず、その特異性は鼻音よりさらに激しいものであると結論づけることができる。